

学位論文要約

藩儒の教育活動とその継承
—吉村家三代を中心に—

教育学研究科博士課程後期教育学習科学専攻

D175554 井上快

論文構成

序章 問題の所在

- 第1節 本研究の問題関心
- 第2節 藩儒とはなにか
- 第3節 先行研究の課題
- 第4節 本研究の目的と構成

第1章 「読書人」育成を目指した学問講究－塾生の政治志向と向き合う－

- 第1節 横議の流行と秋陽の学問論
- 第2節 朝陽館において留意される日常
- 第3節 咬菜塾において志向されるコンテクストの解明
- 第4節 講義中に示される典拠の相違

第2章 塾生の多様化に伴う教育活動の変容－多様な学問欲求と向き合う－

- 第1節 幕末維新期の塾生
- 第2節 講義科目の多様化
- 第3節 講義の工夫・改良

第3章 塾生に対する支援－塾生の学習環境と向き合う－

- 第1節 他国における学問講義
- 第2節 書物の取り次ぎ

第4章 明治前期における塾の展開－時代に即した学問欲求と向き合う－

- 第1節 明治前期の塾生
- 第2節 歴史書の流行
- 第3節 カリキュラムの制定
- 第4節 塾の変容と理念の継承

第5章 師範学校への継承－生徒の将来と向き合う－

- 第1節 彰の学問論
- 第2節 吉村家の家学の継承
- 第3節 講義の簡略化

終章 研究の成果と課題

- 第1節 研究の成果
- 第2節 今後の課題

史料および参考・引用文献一覧

論文要約

(1) 研究の目的・対象・視点

本研究の目的は、藩儒の教育活動の実態を、その受け手との関係から解明することである。加えて、藩儒の教育活動が近代にいかに関承されたのか明らかにする。なお、ここでの教育活動とは、講義や会読といった学問教授に加え、塾生が学問を行うための支援を想定している。

藩儒とは、儒学的知識の所有によって、藩に取り立てられた学者のことである。熊沢蕃山のように好學な藩主によって早くから重用された例もあったが、その数が激増したのは18世紀後半に入ってからである。彼らは一芸事の師匠に過ぎず、藩政への参与も限定的であった。そのため、頼春水ら「寛政異学の禁」を主導した藩儒たちは教育活動を自らの使命として位置づけ、教育活動を通じた治国安民を目指した(頼1986)。加えて、尾張藩の場合、藩儒の人は、藩校の主催者である督学が担っており、下位の教職にいたっては藩校の学生が登用されていた¹(高木1984)。日本教育史上初めて、教育活動を専門的に担う人々が誕生したのである。

近世後期以降の藩儒については、細井平洲、亀井南冥、頼春水らによる公教育論の展開が辻本雅史によって示されている(辻本1990)。また、彼らが、人材育成と風俗教化とを混在させながら藩校教育を構想していたこともすでに指摘されている(前田2016)。しかしながら、彼らが教育者として如何に教育活動にあたったという問題は、依然、未解明のまま残されている。では、藩儒は如何に教育活動を行っていたのだろうか。

注目するのは、幕末に広島三原藩儒をつとめた吉村秋陽(1797-1866)とその後裔たちである。秋陽は佐藤一斎の門下で右に出るものなしと称されるほどの人物であり、広島三原藩校明善堂や広島屋敷内の講学所朝陽館につとめる傍ら、家塾咬菜塾を運営した。斐山(1822-82)は秋陽を継いで明善堂、朝陽館で人材育成に従事し、咬菜塾で門人たちに対しても学問を教授した。明治維新後は広島藩校修道館にもつとめた。彰(1853-1908)は明治7(1874)年に教員養成校白島学校に入学、小学校教員第一等となり、小学校や広島県尋常師範学校に奉職した。

吉村家三代に関しては、荒木龍太郎の一連の研究が存在する(1984など)。荒木は吉村秋陽に関する史料を翻刻、紹介しつつ、陽明学の思想体系の中で秋陽の独自性を位置付けている。しかしながら、荒木の研究では秋陽を陽明学者として把握することに力点が置かれており、吉村家の家業とも言うべき教育活動に関する言及は見当たらない。加えて、研究対象が秋陽に限定されており、斐山や彰については「秋陽以来の「性命の学」を奉ずる王学者としての強固な意志のもとにその生涯を終えたのである」(荒木ら1982、137頁)と推察される

¹ なお、高木の研究では「藩儒」という表現を用いておらず、彼らを「藩校教師」「教育職」と称している。

に留まっている。

本研究が対象とする吉村家三代には日記、書簡、著作物などが残存しており、九州大学附属図書館に吉村家文庫として所蔵されている。353点 674冊 88通にも及ぶ大量の史料であるが、本研究で使用するのは主に4つである。第一に、3代75年にわたる日記史料である。秋陽の日記（『読我書楼長暦』）は、秋陽が佐藤一斎門への遊学を終え、咬菜塾を開く天保4（1833）年に始まり、死去の直前の慶応2（1866）年まで約30年間ほぼ間断なく記されている。斐山の日記（『斐山先生日暦』）は安政3（1856）年から明治15（1882）にいたるまでの26年間、彰の日記（『白齋先生日暦』）は明治5（1872）年から同41（1908）年まで、これらの日記についても、ほぼ間断なく記されている。これらの日記には、藩校や家塾で行った講義や塾生が大坂の書肆から購入した書物が確認でき、幕末から近代前期にかけての教育活動を明らかにすることができる。第二に講義記録であり、安政5（1858）年に行われた『孟子』の講義に関する記録、明治23（1890）年の『論語』の講義に関する記録などが残存している。これらの講義記録には、講義に際した吉村家三代の經典解釈やその解釈を導き出す際に引用した書物が記されており、講義に関してより詳細な分析が可能となる。第三に書簡である。秋陽、斐山がそれぞれ池田草菴との間で交わした書簡や大坂の書肆秋田屋太右衛門に宛てた書簡がすでに翻刻されており、本稿ではそれらを使用した²。これらの書簡には、当人の近況や学友の動向に加えて、読書中の書物や經典の解釈などが記されている。第四に吉村家の学問観を示す史料である。学問観については、秋陽が文政9（1826）年に執筆した『学問ノ管見』と斐山が明治元（1868）年に執筆した『入学志毅』が残されている。これらの史料からは秋陽と斐山が重視した書物、学習方法を読み取ることができる。彼らの理想とした学問と実際の教育活動との共通点、相違点を浮かび上がらせることができる。

本研究では、吉村家三代の教育活動を問う視点として、受け手に注目する。学問が特権階級の専有物ではなくなった近世日本では、学問の担い手たちは、その受け手との関係の中で学問を展開するようになった。例えば溪百年は田舎の初学者を念頭に置いて『經典余師』を著しており、また江村北海は「雄弁」をキーワードにして、学者を対象とした講義と民衆に向けた講談の違いを強調した。こうした時代において、「学問なるものを語る者は、受け手に誰を想定しているのか。学問なるものを語ることによって、説き手は受け手をいかなる方向へと教導しようとするのか。また、語ることによって、説き手は受け手といかなる関係を築き上げようとするのか。そして、語ることによって、説き手は、いかなる負担を自らに背負い込んでいくことになるのか」（高野 2015、16 頁）という高野秀晴の研究課題は、近世教

² 荒木見悟ら編『陽明学大系 11 幕末維新陽明学者書簡集』（明德出版社、1971年）中に「池田草菴書簡（吉村秋陽あて）」「池田草菴書簡（吉村斐山あて）」「吉村秋陽書簡（池田草菴あて）」「吉村斐山書簡（池田草菴あて）」が収録されている。また秋田屋宛の書簡は、水田紀久「書肆秋田屋宛吉村秋陽書翰」（『混沌』9、1984年）および平野翠・多治比郁夫「秋田屋太右衛門來書翰—近世大阪書肆資料（1）—」（『大阪府立図書館紀要』21、1984年）に収録されている。

育史研究において極めて重要な視座となる。ただし、高野の研究は、石門心学を対象としており、また、そこでの受け手を「語り手の想像の産物」に設定している。本研究では、高野の研究に多くを負いながら、実際の受け手との間で展開される藩儒の教育活動を検討したい。

なお、藩儒には様々な受け手が存在した。侍講の場合、藩主やその世子が受け手であり、藩校では藩士たちが受け手に該当する。また地域の人々から依頼を受けて個別指導を行うことがあり、家塾³を運営して塾生に対しても教育活動を行っていた⁴。本研究では、種々いる受け手のうち、家塾の塾生に注目する。吉村家の家塾の場合、塾生の多くは庶民層であった。近世を通じて幕藩公権力が彼らに対して就学を強制することはなく、彼らは各々の動機や事情で入塾していた。塾生は身分制社会の維持という藩儒の使命や彼らの専門とする学問に共感する者ばかりではなかっただろう。藩儒は彼らと如何に向き合い、いかなる教育活動を展開するのだろうか。

(2) 先行研究の整理と課題

藩儒は、従来、日本思想史研究の分析対象であり、個々の思想的営為については分厚い蓄積がある。また近年では、藩儒の社会的役割に注目し、彼らの地域社会における様々な活動が解明されてきている（小林 1999、澗上 2009 年など）。ただし、ひとたび近世教育史研究に目を向けてみると、藩儒が積極的に取り上げられてきたとは言い難い。その要因は以下の2つ考えられる。

第一の理由は、近世教育史研究が永らく「近代初等教育制度あるいは国民教育制度の「源流」「淵源」」を探求してきたことである（入江 1984、81 頁）。石川謙は、昭和初期の師範学校において日本教育史学が軽視されていることに危機感を持ち、そうした状況を打破すべく「明治の教育が江戸の母胎の中に発育しつゝあつた経過を明らかに」することを研究課題に据えた（石川 1929、7 頁）。1980 年代までの近世教育史研究は石川の課題意識を共有して進展した。藩校の校舎や学科目を検討し、そこに総合大学の姿を見出した笠井助治（1982）、会談などの近世の学習方法を近代的な教育方法の萌芽として位置づけた武田勘治（1969）、山鹿素行をルソーと「一脈通ずる」と評価するなど、著名な思想家の教育思想を近代教育に通用するものとして再構成した中泉哲俊（1966）らの研究も同様の立場から行われている。

上記の研究者は、近世における教育活動の中から「狭い鎖された封建主義・儒教一辺倒主義から解放され、封鎖的藩国主義の殻を脱し」ていた点を発見し、「近代教育文化の黎明」として強調してきた（笠井 1970、2104 頁）。しかしながら、藩儒は儒学的知識の所有者であ

³ 本研究では家塾を「藩儒たちが、藩の内意なり了解を得て自宅に開いた塾」（石川 1960、349 頁）と捉える。

⁴ 広島県域に存在した塾を確認すると、塾主 60 名のうち 14 名は藩儒として藩校でも勤めていた（文部省 1904）。

る。言い換えれば、「封建主義」や「封鎖的藩国主義」の体現者である⁵。そのため藩儒については、彼らが担った職務や身分について言及がある程度で、積極的な研究対象とはなり得なかったのである。

こうした状況に追い打ちをかけたのがリチャード・ルビンジャー、海原徹らの私塾研究である。「幕末維新时期運動の牛耳をとった政治的党派に吉田松陰の松下村塾に学んだ人びとが数多くみられ、また彼らが日本近代化のリーダー的存在として活躍したことは広く知られている。彼らが長州藩藩校の明倫館教育と一線を画し、あるいはこれを拒絶、克服することによって、新しい時代を拓く先覚者たりえたことも、まず異論のないところである」とルビンジャーが指摘して以降（ルビンジャー1982）、藩校での教育活動に従事していた藩儒には守旧というレッテルが貼られ、まったく顧みられなくなってしまった。ましてや藩儒の教育活動がいかに近代に引き継がれたかということについては関心すら持たれなくなった⁶。

藩儒が研究対象として見なされなかった要因の2つ目として、江戸時代が学習社会であったと見做されていることが挙げられる。こうした主張は、明治時代以前の辞書のなかに「教」よりも「学」に関わる文字が多いことを指摘した中内敏夫（1973）や学習者の主体性を重視した貝原益軒の教育観を「学習法的教育観」と名付けた江森一郎（1990）によって定着した。学習社会においては学習者がいかに学んだかが問題であり、教育者がそこで如何に教えていたかは解明されるべき課題とならなかったのである。

1980年代に入ると、近世教育史研究は大きく転換する。入江宏は近世教育史研究が今後取り組むべき課題を「今日、とりわけ求められている課題は、伝統社会における教育システムの総体をできるだけリアルに、しかも構造的にとらえなおし、提示することによって、今、われわれの眼前にある巨大化し肥大化した近代教育制度を歴史的に相対化することにある」と指摘した（入江1984、82頁）。日本教育史研究が黎明期から寄り添ってきた近代学校制度はすでにその正当性が揺らいでいた。加えて隣接する学問分野でも、近世社会の中から近代社会の萌芽を見出す研究が批判されるようになっていた⁷。そこで、1980年代以降の近世教育史研究は、個別実証に力点を移し、「伝統社会における教育システムの総体」を「リアル」に「構造的」に把握することを目指すようになった。

この潮流は、以前とは比べ物にならない水準で近世における教育活動の実態を明らかにした。ただし、こうした研究動向が「巨大化し肥大化した近代教育制度を歴史的に相対化すること」と結びついて展開されたことには留意する必要がある。すなわち、これらの研究で描かれるのは、近代公教育制度に対抗するかたちでの、在野における豊かな教育活動であっ

⁵ 丸山真男の議論によって儒学（とくに朱子学）を「封建主義」と同義とする図式が定着していった。ただし、その後の丸山批判はこの図式に対しても再検討を迫っている（尾藤1978）。

⁶ そもそも近代化に伴い、儒学（漢学）に対する需要は消長したと捉えられてきた。近年、池田雅則（2014）によって明治中期まで漢学塾が隆盛したことが明らかにされ、近代における儒学教育の研究の必要性が認識されつつある。

⁷ 例えば日本思想史学では子安宣邦（2000）などが挙げられる。

た。「地域教育史」を提唱し「地域の細部にこだわり、また地域の全体の学びや教育を掘り起こし、それらを地域に存在した生活と文化の営みの中で考察すること」を目指した木村政伸（2006）、地域文化人の教育活動や文化的営為によって生成されていく「地域」の様相を描いた鈴木理恵（2012）、農民が一揆訴状を手習い教材として学んでいたことを検証し、民衆の学びを彼らの生活、主体形成との関係で論じた八鍬友広（2001）らの研究は、いずれも地域の人々の日常生活に寄り添った教育の様相が描かれている。また本研究に関わって、儒学の經典解釈に踏み込んだ川村肇の業績も同様である。川村は、在村知識人の儒学理解が村落共同体の現実から出発しており、地域の実情に即した經典解釈が行われていたことを指摘している（川村 1996）。こうした研究動向において、藩という公権力に召し抱えられていた藩儒は魅力的な研究対象たり得ず、その後も研究が停滞してしまっている。

本研究では、これまで先行研究で看過されてきた藩儒に着目して、その教育活動の実態を明らかにする。藩儒に注目することで、以下の3点で近世教育史研究上に新たな知見をもたらすと考える。第一に、頂点思想家の思想史研究やオフィシャルな制度史研究では把握できない、教育活動の実態を明らかにできることである。第二に、家塾という、藩校とも私塾とも異なる学舎の特質を教育者の立場から明らかにできることである。第三に、教育活動の近代への継承を検討できることである。従来の近世教育史研究では、明治期を時代区分に包括しておらず、近代教育への継承を演繹的に導き出してきた。本研究では、教育者に焦点を当てることで、彼らの家業が近代に継承されていく過程を具体的に追うことができる。

(3) 論文の概要

第1章 「読書人」育成を目指した学問講究—塾生の政治志向と向き合う—

第1章では、幕末期の政治的な議論、活動の流行を念頭に置いて展開する秋陽の講義を明らかにした。

黒船来航により国中が「騒擾」となり、志士たちの過激な政治的活動が遠近に見えていた。庶民までもが幕府や藩の政治について口にする事態は、身分制社会の崩壊として秋陽の目に映った。もちろん儒者である秋陽にとって内憂外患をただす手段は儒学思想に基づく政治実践の他にあり得ない。だが、それは為政者層がなすべきことであって、秋陽自身も含めた庶民層が議論することではなかった。咬菜塾の塾生がどれほど政治的な議論や活動に接近していたのかは史料的な制限があり知ることはできない。しかし、白石廉作（安政2年入塾、翌年退塾）のように咬菜塾を退塾した後に志士として奔走する人物はいた。塾生を政治的な議論から引き離すことが秋陽にとって喫緊の課題であった。秋陽は、テキストの真意の解明それ自体に価値を置き、自身もひたすら学問講究に取り組む「読書人」であろうとする。また講義の際は眼前の政治問題と学問とを結びつけないよう留意し、「同志」を求めて家塾での教育活動を行うのである。

安政4（1857）年から翌年にかけて咬菜塾で行われた『孟子』の講義記録には、庶民層を学問講究に誘う様子が見て取れる。『孟子』離婁章句下2は、子産という為政者が冬の川を

渡渉している者を哀れに思い自分の乗り物に乗せたことに対して、孟子が為政者の行為でないとして批評する内容である。この章について咬菜塾では、「子産ノ様ナ政ヲスル人」としては「ヨキヲニテナラヌ」と『孟子』本文の論旨を簡潔にまとめている。だが、続けて「吾輩ニ在テハ甚タヨキヲ也」として、為政者である子産と政治を担う立場にない秋陽たちとでは善徳が異なると解説を加える。行為の良し悪しは「其人ノ位」に「相応」するものだと述べ、身分や立場に応じた行為を塾生たちに示すのである。

では、政治を担う立場にない庶民層の塾生たちにとっての「相応」の行為とは何か。秋陽は講義中、学問の講究こそ彼らに「相応」の行為として示す。『孟子』告子章句下 15 には舜や傅説など天子や宰相が登場し、彼らの「大任」（本文の文脈では天下を治めること）についての議論が収められている。この章について咬菜塾では、過去の優れた学者を継承し、後学を振興することもまた「大任」であると解説されている。秋陽は塾生たちを政治ではなく学問講究の道へと誘うのである。

「読書人」の育成を目指した咬菜塾の講義は、藩士が通っていた朝陽館の講義と比較して 2 つの特徴があった。1 つ目の特徴は、次の表 1 から確認できる通り、語句レベルの解説よりも各章の大まかな意味やその章に対する解釈の提示を重視していた朝陽館の講義に対し、咬菜塾での講義は、解説箇所が多く、語句レベルでの解説にも力を注いでいたことである。その際は『孟子』本文の主旨とほとんど関係のない語句の読み方にも解説が及んでいた。

表 1 講義における解説の分類

		聞見録							計	私録							計
		語釈	大意	見解	語・大	語・見	大・見	全		語釈	大意	見解	語・大	語・見	大・見	全	
梁恵王章句	上	記載なし							—	記載なし							—
	下	記載なし							—	記載なし							—
公孫丑章句	上	記載なし							—	7	19	14	7	4	6	1	58
	下	記載なし							—	1	12	3	0	3	0	0	19
滕文公章句	上	記載なし							—	7	2	2	0	2	1	0	14
	下	記載なし							—	8	13	6	3	3	1	0	34
離婁章句	上	1	0	1	0	0	0	0	2	12	5	8	2	1	2	0	30
	下	記載なし							—	13	6	6	1	4	1	1	32
万章章句	上	0	0	1	0	0	1	0	2	2	0	3	0	0	0	0	5
	下	0	1	2	0	0	2	0	5	0	1	4	0	0	1	0	6
告子章句	上	1	4	2	1	1	1	0	10	2	7	1	1	2	0	0	13
	下	0	3	1	0	0	0	0	4	3	2	4	1	0	1	0	11
尽心章句	上	2	2	7	0	1	1	0	13	12	16	4	2	5	5	2	46
	下	記載なし							—	3	7	12	2	3	3	1	31
計		4	10	14	1	2	5	0	36	70	90	67	19	27	21	5	299

(『聞見録』、『私録』より作成)

2 つ目の特徴は、朝陽館の講義が『孟子』の内容から教訓や徳目を導き出すことに注力していたのに対し、咬菜塾では登場人物の発言の真意が推察されるなど、『孟子』本文のコンテキストの解明が目指されていたことである。例えば『孟子』公孫丑章句上 1 に対する解説では「真ニ齊国カキリノ男ジヤ」という孟子の発言について、その真意が推察されている。

秋陽いわく、公孫丑が「古今聖賢歴々ト大功業ノヲシラ」ず、齊国出身の「管晏二子ヨリ外ニ」優れた「人ハナキ様ニ思」っているので、「真ニ齊国カキリノ男ジヤ」という発言に至ったのである。

コンテキストに留意することそれ自体は当該期において珍しい経典解釈の方法ではなかったが、重要なのはこの講義方法が朝陽館で採用されなかったにもかかわらず、咬菜塾では採用されていたことである。庶民層の塾生を「読書人」として育成するための、彼らを学問の道へと誘う講義であったと考えられる。

第2章 塾生の多様化に伴う教育活動の変容—多様な学問欲求と向き合う—

第2章では、塾生の学問欲求や学習レベルに対応するかたちで変容する咬菜塾の教育活動の内実迫った。咬菜塾では「読書人」の育成を目指して講義を行っていたが、学問の講究には学習者中心の読書が不可欠であった。そのため幕末維新期の咬菜塾では塾生の興味、関心を尊重した教育活動を行っていた。

咬菜塾の塾生の出自は安政年間を前後して大きく異なる。嘉永年間以前の咬菜塾には、各地の藩儒が多く入塾していた。彼らは佐藤一斎のもとへ遊学するなどして陽明学を修めており、中には、陽明学の修学を期待して門人を咬菜塾に送り出す人物もいた。当該期の咬菜塾は、池田草菴に「同志」たちの集まる「社中」と評されており、学習結社としての性格が強かった。一方、安政年間以降の咬菜塾には、石見国をはじめ、近隣の諸国から庶民層の入塾が相次ぐようになった。彼らの多くは各村のリーダーや医師であったが、藩命によって入塾する者もあり、当該期の咬菜塾には実に多様な出自の塾生が混在していた。

塾生の出自の多様化するにともなって、咬菜塾では授業で扱うテキストが多様化し、また個別教授も増加していった。嘉永年間以前の咬菜塾では、四書五経など儒学の基本的なテキストを扱っていたが、安政年間以降の授業では、歴史書や『小学』の講釈が行われるようになる。歴史書の教授は当該期、全国的にみられる動向であったが、秋陽は経学者を自負しており、塾主の専門分野よりも塾生の関心が尊重されていたことが分かる。この点については、塾生が在塾中に購入した書物からも確認することができ、秋陽が酷評する書物を塾生が購入する場合があった。

嘉永年間以前の咬菜塾ではほとんど見られなかった授業形態である個別教授が、安政年間以降多く見られるようになる。個別教授では、その時期に扱われていないテキストの講釈が行われており、塾生の学問欲求の多様化に対応するために行われていたことが分かる。また入塾して間もない塾生も個別教授を依頼することが多く、秋陽や斐山は塾生の学問欲求や学習レベルに対応して教育活動を行っていた。

多様な出自を持つ塾生が多くなったことで、秋陽や斐山は授業を工夫、改良するようになる。咬菜塾では、安政年間ごろから、まず塾生に朱子の注釈を学習させるようになる。この工夫は佐藤一斎らも行っており、塾生の学力レベルに対応した工夫、改良であった。斐山は池田草菴の経験知も取り入れながら授業を工夫、改良していた。ただし、斐山が塾生の「了

悟」、すなわち理解できたか否かを意識し始めるのは明治前期以降のことである。幕末維新期の時点では、「通曉」は学習者自身で向き合うべき課題であった。本章では、塾生の出自や関心に対応するかたちで教育活動が変容していく様相が明らかになった。

第3章 塾生に対する支援—塾生の学習環境と向き合う—

第3章では、退塾生に対する秋陽と斐山の学習支援を追跡した。近世を通じて遊学は盛んに行われていたが、あらゆる事情のために志半ばで退塾する場合が多かった。咬菜塾の場合も同様で、咬菜塾で学んでいた塾生は長くても5年以内に退塾している。池田草菴は秋陽に宛てた書簡で、遊学について「読書之種子」を伝えることだと述べている。短期間の遊学では、「読書之種子」を伝えることに限界があった。その「読書之種子」を開花させるためには、塾生たちが退塾した後も学問を継続しなければならなかった。藩儒の立場から言えば、塾生たちに植え付けた「読書之種子」が開花するよう、彼らが退塾した後も学習ができるよう支援していく必要があった。

ただし、当該期は書物の流通量が増加し、各地に本屋や蔵書家が登場したものの、高価で容易に入手できる代物でなかった。秋陽と斐山は、退塾後の塾生の書物の購入も援助していた。江戸時代、地方在住の人々が京都や大坂の書肆から書物を購入するには藩儒の取り次ぎが必要であった。そこで秋陽は、咬菜塾の塾生たちが退塾した後も読書を継続できるよう、自身と関係の深い大坂の書肆秋田屋に対して、彼らの注文に対応するよう依頼していた。また幕末に書物の価格が高騰すると、秋田屋に価格を抑えるための「御働」を求めていた。塾生が退塾した後も学問の道に邁進できるよう、また彼らの厳しい学問環境を考慮し、藩儒は教育活動を展開していたのである。

また秋陽は、退塾後の塾生のもとに赴き、講義を行っていた。他国における秋陽の学問教授は、「他邦之君ニ仕へ」るような行為だと批判されることもあったが、秋陽は石見国、長門国、讃岐国などで講義を行った。明治元（1868）年に斐山が塾生に対して示した学問の心得「入学志穀」には、羅仲素の「師事」のエピソードが紹介されている。羅仲素は学問のために600キロメートルも離れた場所にいる人物に「師事」しており、その関係は20年以上も続いた。秋陽や斐山にとって、学問上の師弟関係は地理的な距離を超えて、また生涯に及ぶものであったのである。

第4章 明治前期における塾の展開—時代に即した学問欲求と向き合う—

第4章では、明治前期における咬菜塾の実態に迫った。咬菜塾では、明治5（1872）年以降に塾生数が急増する。幕末期には毎年5人前後の入塾者数であったが、明治5年には44人、同7年には39人、同9年には42人が入塾している。彼らの多くは「師範学校へ入学望ミノ者」であり、その「下コシラへ」のために咬菜塾で学んでいた。当該期の社会には「当時は漢学者でなくては子供同様」という気風があり、同じ教員でも漢学者とそうでない者とは月給が異なる場合があった。こうした背景により、教員志望者が咬菜塾で学ぶようにな

っていた。

教員志望者、言い換えれば「読書人」を目標としない塾生の増加により、咬菜塾では以前にも増して歴史書の学習が行われるようになる。こうした事態を斐山は「学問之浅露」だと嘆いている。ただし、斐山は「読書人」の育成を目指しており、そのため塾生の関心に沿った読書を尊重していた。彼が「読書人」の育成を目指す限り、たとえ歴史書であっても塾生の学問欲求として受け入れざるを得なかった。

咬菜塾ではその後も塾生の学問欲求に沿った読書という理念が堅持された。明治13(1880)年の時点でも「教則」や「書目」が定められておらず、その時々「衆議」によって学習内容を決定していた。明治14年に至り、ようやく咬菜塾ではカリキュラムが制定されるが、その際も塾生の関心に対応できる余地を残していた。このカリキュラムに関しては、明治14年5月8日以降、塾内で議論されているものの、同年12月に提出した「開申書」は「教則疎漏」として一度「却下」されている。「教科書目」を記載して再提出するよう指導を受けている。半年間も議論を重ねてきた中で「教科書目」に話題が及ばなかったとは考えにくい。咬菜塾では「教科書目」を設定しないことに執心していたと考えられる。

様々な改革が行われた明治前期の咬菜塾であったが、塾生の関心に沿った読書という理念は堅持し続けた。たとえ歴史書の読書が塾内で流行しようとも、斐山は「万分之一」でも賛同してくれる「同志」の登場を待ち続けたのである。

第5章 師範学校への継承－生徒の将来と向き合う－

第5章では、明治前期の広島県尋常師範学校における彰の『論語』講義について、留正書院(もとの咬菜塾)の講義との比較を通じて検討した。その結果、尋常小学校の教員を目指す師範学校の生徒に対応するかたちで展開される彰の講義の様相が明らかになった。

彰は『広島県私立教育会雑誌』(第20号、明治22年6月)に『訓蒙大意』の訓読を投稿しており、道徳心の育成についての議論を展開する。『訓蒙大意』とは、「児童教育ノ事」に関する王陽明の見解である。彰は、『訓蒙大意』について「方今ノ教育主義ニ適合セザル所アリト雖其大旨ニ至リテハ教育家ノ一助ニ庶幾カラン」と述べ、「普通文ニ改写シ以テ教育家ノ参考ニ供ス」ることを期待している。

『訓蒙大意』において王陽明は「童子ヲ教フルニハ、惟当サニ孝弟忠信礼儀廉恥ヲ以テ専務トナスベシ」と言い、道徳心の育成を教育の目的に据える。ただし、道徳心の育成は学問を通じて行われる。学問に没頭することで、児童は「習フヲ楽ミ倦マズシテ、而シテ邪僻ニ及ブニ暇ナカラシムル」ようになるのである。王陽明は具体的な教授方法にまで言及する。

「凡ソ書ヲ授クルハ徒ニ多キニ在ラズ、但精熟ヲ貴ブ、其資稟ヲ量リ、二百字ヲ能クスル者ニハ、止ダ授クルニ一文字ヲ以テスベシ」、つまり二百字習得できる者には百字だけ教えよという。王陽明によれば「常ニ精神力量余リ有ラシメバ、則厭苦ノ患ナク」学習することが重要であり、そうすることで児童は「楽ンデ」学問に取り組むのである。

彰は、王陽明の見解を引用しながら、児童が学問に没頭できるよう、負担のない学習を主

張っていた。そして、師範学校における彰の講義は、塾での講義と比較して負担の少なくする工夫がなされていた。

まず重要なのは、幕末以来行われてきた吉村家の教育活動を彰が継承していることである。広島県尋常師範学校における彰の講義を見ると、秋陽の講義記録や留正書院における講義との共通点を多く確認できる。表2の通り、彰の講義記録（『論語講義』）の余白には、斐山が書き遺した秋陽の講義の記録（『見聞録』）をそのまま書き写した形跡が確認できる。加えて、『論語講義』では、多くの章で佐藤一斎の注釈（『論語欄外書』）を引用している。秋陽は一斎の高弟であり、秋陽が受けた学問的影響は多大であった。幕末以来吉村家で継承されてきた家学が明治20年代の師範学校においても実践されていた様子が見えてくる。

表2 『論語講義』と『見聞録』の比較

	『論語講義』	『見聞録』
八佾章	全体勿体ナウテ忍ハレヌヲヂヤニ是ヲ忍フナラバ	
三家章	者ハ□□□三子者之者	
林放章	林放ハ注ニ魯人バカリアレトモ御門人ニテアルヘシ。此人格別ノ人ニハ非ス。注ハ餘リ林放ヲヨク見過サレタルヤウニ覺ユ。世道ニ志アル人ニ非ス。夫子ノ御答、又此章之次李氏施ノ章ニテシルベシ	○林放問礼章。林放ハ注ニ魯人ハカリアレトモ御門人ニテアルヘシ。此人別格ノ人ニハ非ス。注ハ餘リ林放ヲヨク見過サレタルヤウニ覺ユ。世道ニ志アル人ニ非ス。夫レハ孔子ノ問答、又此章之次李氏施ノ章ニテシルヘシ
	大哉問。一応ハ御憂ナル詞、意ハ分限不相応ノ問ヒト云フ意。	○大哉問。一応ハ御憂ナサル詞、意ハ分限不相応ノ問ヒト云フ意。礼云々、一体礼ノ本ハ心術上ニアリ。上章ノ如シ。然ルニ事柄ニテ御答アルハ林放相応ノ御答ナリ
		○礼ノ大スチ冠婚葬祭ナリ
		○喪云々ト礼ノ中ヨリ喪ノヲヲセラルハ、喪ハ親ノ終リ人子ノ十分丁寧ニスヘキ所、孟子ニモ君子不為天下俟其親トアリ。ナリタケハ厚クスベキヲナリ。夫故寧儉トハ言難シユヘニ喪ノヲハ別ニ言シタルモノナリ。
季氏章	泰山ノ正互ノ神ヲ林放ニモカナハヌト李氏ハ思フテ□少ルカ非礼ノ祭□スレハ神罰ハ□ルベシ	○季氏云々、汝弗能救与。是聖人之□□。トウモ人ノ悪ヲ見テアルニ忍ハレヌナリ
君子章	凡ソ争ハ彼我ノ見ヨリ起ル。君子ハ物我一体ユエ一向争フ場所ハナヒ。必ハ是非トモ争フカアリハセヌカトタツヌルニ先ツ於射乱乎、争ニ似タリ。	○君子無所争云々。凡ソ争ハ彼我ノ見ヨリヲコル。君子ハ物我一体ユヘ一向アラソウ場所ハナヒ。必ハ是非トモ争フカアリハセヌカトタツヌルニ先ツ於射乱乎、争ニ似タルヲアリ。
		○揖讓而升ハ堂下ニ彼ト此トキミカ分ル將レ射トキハ向ノ相手人ト此方ノ人ト各一人ツ、相手ニナリ西階東階ヨリ堂ニノホル。其ノボル時ニ互ニ揖讓スル也。下而飲ハ射畢テ堂ヲクダル。衆耦。皆射畢テソレヨリ後、先ノ射手兩人又堂ニ登リ勝者杯ヲトツテ不勝者ニノマセル
子夏章	素以為絢。此一句、此ノ体ニシテ三通リニ見ラルハ、素キ□ヲ以テアヤヲナス。又素キ物カ即アヤトフル。此ノ□ニ見ラルハナト既ニ子夏モタ、疑之テ問ハルハナリ。孔子モタ、其処ヲ□答□知ルハカリナリ。	○曰礼後乎。是子夏ノ始悟問ノ詞ニ非ス ○子曰起予者（句絶）孔子ノ氣ノツカヌ所ヲ起ストイフニ非ス。譬ヘハ鐘ノ如シ。驚天動地声アレドモタ、カネバ其声ハ發セヌナリ

（『論語講義』と『見聞録』より作成。ゴシック体は類似の箇所、『見聞録』中の斜体は、『論語講義』の余白ではなく本文中に引用されている箇所を指す。）

ただし、広島県尋常師範学校における講義は、吉村家の家学を継続しつつも、それを簡略化したものであった。留正書院における講義は、一斎の注釈に加えて、中井履軒らの学説が提示されている点に特徴があった。その際は彰が支持する学説を明言しない場合もあった。例えば『論語』子夏問章における「古註」と「本註」について、彰は「此二説、未知孰是」

としており、「イズレニシテモ此詩ハ美人ノ事ヲ咏スル詩也」と判断を避けている。明快な解説というよりも、彰の経験してきた学習の過程を追体験させるかのような講義であったことがうかがえる。一方の広島県尋常師範学校では、提示する学説が減少し、また各章の冒頭に要点が提示されるなど、明快な解説が行われていた。師範学校における彰の講義が、明治前期の留正書院の講義を土台としつつ、それを簡略化したものであったことが明らかになった。学問講究を目指した留正書院と比べて、師範学校では、明快で負担の少ない講義が行われていたのである。小学校教員になる生徒たちに向けて、彼らに有用な講義を実践していたのである。

研究の成果と今後の課題（終章）

本研究では藩儒の教育活動について、受け手との関係から議論を進めてきた。

幕末維新期の咬菜塾には多様な塾生がおり、秋陽、斐山は彼らと向き合いながら教育活動を展開していた。具体的に言えば、当該期の塾生には政治志向を持つ者、歴史書に関心がある者、厳しい学習環境の中で学ぶ者がいた。吉村家ではそれらを尊重しながら、ときには上手くコントロールしながら学習を支えていた。

黒船の来航以降、「志士」たちの政治的活動が横行し、庶民層までもが政治的な議論を行うようになっていた。吉村秋陽にとってそれは身分制社会の崩壊に他ならなかった。そこで秋陽は、眼前の政治問題に気を取られず、ひたすら經典の真意を講究する「読書人」を構想し、また「読書人」を希求して家塾での教育活動にあたった。家塾において秋陽は、經典のコンテキストの解明に注力しており、語句に至るまで詳細な解説を行っていた。

ただし、「読書人」の育成には、学習者中心の読書が不可欠であり、秋陽と斐山は、必然的に塾生たちの学問欲求と向き合う必要が生じた。当該期は歴史書の読書が全国的に流行しており、咬菜塾も同様であった。庶民層の入塾が相次ぐ安政年間以降の咬菜塾での学びは経学者を自負する秋陽の専門分野を越えて展開されていた。塾生の学問欲求を尊重し、彼らを学問の道へと誘う教育活動が実践されていたのである。そして、秋陽と斐山は塾生が退塾した後も学問に邁進できるよう書物の取り次ぎなどの学習支援を果たしていた。

斐山と彰は、明治維新後も受け手との間で教育活動を展開する。彼らの眼前には、師範学校入学を志望する塾生がおり、また小学校教員を夢みる師範学校の生徒がいた。明治前期の咬菜塾（留正書院）では、カリキュラムが制定され、また「質疑」の時間が設定されるなど様子が一変していた。しかし、カリキュラム制定後も塾生の関心に沿ってテキストを選択できる余地を残しており、塾生の学問欲求に基づく読書が保障されていた。そのため、歴史書の読書が以前に増して行われるようになった。斐山はこうした状況を嘆いていたが、「読書人」育成を目指し限り受け入れざるを得なかった。

秋陽以来、「読書人」育成を目指して教育活動を行ってきた吉村家であったが、広島尋常師範学校における彰の講義では、そうした傾向が薄まった。師範学校における彰の講義は、留正書院における講義を土台にしながらも、それが簡略化されていた。小学校教員を目指す

生徒たちに向けて、彼らが将来実践すべき講義を展開していたのである。

藩儒に注目すること自体、これまでの教育史研究では本格的になされてこなかった。本研究の第一の意義は、これまで等閑視されてきた藩儒を研究対象として見出したことにある。

藩儒に注目することで、得られた知見は次の3点である。まず、近世における教育活動の実態を明らかにすることができた。秋陽は眼前の政治問題に関わらず学問に没頭する「読書人」を構想し、「読書人」育成を目指して講義を行った。身分制秩序の再建を目指した教育活動の一つの展開であった。

次に家塾の特質を教育者の立場から明らかにできた。藩儒は家塾において学習者の政治志向や学問欲求など常に向き合わねばならなかった。結果的に藩儒は、学習者を如何なる方向へと導くのか、如何に教えるのか、という難問に向き合うことになった。家塾は、藩儒の教育者としての自己形成の場であった。

最後に、近世の教育活動の近代への継承を検討することができた。近世に展開された教育活動は、家業として、彼らの後継者らによって継承されたのである。

本研究では、藩儒の教育活動の受け手を家塾の塾生に限定して議論を進めてきた。ただし、冒頭に示したように藩儒の教育活動の受け手は多岐にわたる。藩主やその世子を対象として進講、藩士を対象とした藩校での教育活動も含めて検討することが今後の課題である。

重ねて、秋陽の提示した「読書人」についても、当該期の考証学との関係で検討していく必要がある。今後の課題としたい。

主要史料および主要参考・引用文献

【史料】

宇野哲人ほか監修『陽明学大系 11 幕末維新陽明学者書簡集』明德出版社、1971年。

江村北海著・黒川真道編『授業編』（『日本教育文庫—学校篇—』日本図書センター、1977年）。

多度津文化財保存会編『林良斎全集』ペリかん社、1999年。

平野翠・多治比郁夫「秋田屋太右衛門来書翰—近世大阪書肆資料（一）—」『大阪府立図書館紀要』21、1984年。

福沢諭吉著・富田正文編『学問のすすめ』（『福沢諭吉選集』第3巻、岩波書店、1980年）。

広島県師範学校編『六十年回顧録』広島県師範学校、1935年（国立国会図書館デジタルコレクション参照）。

水田紀久「書肆秋田屋宛吉村秋陽書翰」『混沌』9、1984年。

諸橋轍次ほか監修『朱子学大系 11 幕末維新朱子学者書簡集』明德出版社、1975年。

吉村彰「訓蒙大意教読劉伯頌等ニ示ス」『広島県私立教育会雑誌』第20号、明治22年。

吉村家文庫「質問雑記」（九州大学附属図書館所蔵）。

吉村家文庫「私録：安政四年丁巳三月十七日ヨリ戊午秋七月二十一日」（九州大学附属図書館所蔵）。

吉村家文庫「第二号 庚寅九月十二日起稿同月二十日卒業 論語講義〈自八份至里仁〉」（九州大学附属図書館所蔵）。

吉村家文庫「登門録」（九州大学附属図書館所蔵）。

吉村家文庫「読我書楼長曆」（九州大学附属図書館所蔵）。

吉村家文庫「入学志穀」（九州大学附属図書館所蔵）。

吉村家文庫「白齋先生日曆」（九州大学附属図書館所蔵）。

吉村家文庫「斐山先生日曆」（九州大学附属図書館所蔵）。

吉村家文庫「聞見録」（九州大学附属図書館所蔵）。

吉村家文庫「明治十三年五月改正 光齋舎入塾規則」（九州大学附属図書館所蔵）。

吉村家文庫「明治十四年一月 留正書院規則」（九州大学附属図書館所蔵）。

吉村家文庫「論語講義筆記 止公治長編」（九州大学附属図書館所蔵）。

【参考・引用文献】

青木充延『三原志稿』三原志稿出版会、1912年。

浅井雅「藩儒の修学過程と公務—龍野藩儒股野玉川を主な事例として—」（『教育史フォーラム』8、2013年）。

浅井雅「諸藩における儒者登用の動向—一七～一八世紀の龍野藩を中心として—」（『日本思想史学』46、2014年）。

荒木龍太郎・荒木見悟『叢書・日本の思想家 46 吉村秋陽・東沢瀉』明德出版社、1982年。

荒木龍太郎「吉村秋陽「読我書楼長曆」について」（『都城工業高等専門学校研究報告』18、1984年）。

荒木龍太郎「陽明学者吉村秋陽の「体認」について」（『活水日文』20、1989年）。

荒木龍太郎「幕末期陽明学者吉村秋陽の「秋陽事歴略記」について」（『活水日文 上野日出刀先生退任記念号』28、1994年）。

荒木龍太郎「幕末維新期の儒者・東沢瀉の思想の一考察—吉村秋陽・斐山父子との関連をとおして—」（二松学舎大学『陽明学』13、2001年）。

池田雅則『私塾の近代—越後・長善館と民の近代教育の原風景—』東京大学出版会、2014年。

石川謙『日本庶民教育史』刀江書院、1929年（国立国会図書館デジタルコレクション参照）。

石川謙『日本学校史の研究』小学館、1960年。

稲垣忠彦『明治教授理論史研究』評論社、2001年（初版1995）。

入江宏「近世Ⅰ／近世Ⅱ・近代Ⅰ、概説」（『講座 日本教育史』2、第一法規、1984年）。

宇野田尚哉「儒者」横田冬彦編『身分的周縁と近世社会 5 知識と学問をになう人びと』吉川弘文館、2007年。

海原徹『近世私塾の研究』思文閣出版、1993年（初版1983）。

江森一郎『「勉強」時代の幕あけ』平凡社、1990年。

岡田武彦『江戸期の儒学—朱王学の日本的展開—』木耳社、1987年。

荻生茂博『近代・アジア・陽明学』ペリカン社、2008年。

笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下、吉川弘文館、1970年。

笠井助治『近世藩校の総合的研究』吉川弘文館、1982年（初版1960）。

亀田一邦「幕末長州支藩の王学派台頭に関する俯瞰的考察—吉村秋陽とその門人の軌跡を軸として—」『山口県地方史研究』85、2001年。

川村肇『在村知識人の儒学』思文閣出版、1996年。

神辺靖光『日本における中学校形成史の研究（明治初期編）』多賀出版、1993年。

木村政伸『近世地域教育史の研究』思文閣出版、2006年。

久米裕子「中井履軒の『論語』注釈方法に関する一考察—『論語逢原』「学而篇」を中心に—」加地伸行博士古稀記念論集刊行会編『中国学の十字路口—加地伸行博士古稀記念論集—』研文出版、2006年。

小林准士「近世における知の配分構造—元禄・享保期における書肆と儒者—」日本史研究会『日本史研究』439、1999年。

小久保明浩『塾の水脈』武蔵野美術大学出版局、2004年。

子安宣邦『方法としての江戸—日本思想史と批判的視座—』ペリカン社、2000年。

齋藤希史『漢文脈と近代日本』KADOKAWA/角川学芸出版、2014年。

鈴木博雄『近世藩校に関する研究』星雲社、1995年。

鈴木理恵「近世末期芸州の漢学塾を介した書籍貸借—塾生を中心に—」『長崎大学教育学部社会科学論叢』63、2003年。

鈴木理恵『近世近代移行期の地域文化人』塙書房、2012年。

高木靖文「近世Ⅰ／近世Ⅱ・近代Ⅰ、第六章」『講座 日本教育史』2、第一法規出版、1984年。

高瀬代次郎『佐藤一斎と其門人』鳳文書館、1985年。

高野秀晴『教化に臨む近世学問—石門心学の立場—』ペリカン社、2015年。

高橋陽一『共通教化と教育勅語』東京大学出版会、2019年。

武田勘治『近世日本学習方法の研究』講談社、1969年。

竹村英二『江戸後期儒者のフィロロギー—原典批判の諸相とその国際比較—』思文閣出版、2016年。

辻本雅史『近世教育思想史の研究—日本における「公教育」思想の源流—』思文閣出版、1990年。

辻本雅史『思想と教育のメディア史—近世日本の知の伝達—』ペリカン社、2011年。

中泉哲俊『日本近世教育思想の研究』吉川弘文館、1966年。

中内敏夫『近代日本教育思想史』国土社、1973年。

中村春作『江戸儒教と近代の「知」』ペリカン社、2002年。

中村春作「懷徳堂学派の中庸論」市來津由彦ら編『江戸儒学の中庸注釈』汲古書院、2012年。

野口武彦『王道と革命の間—日本思想と孟子問題—』筑摩書房、1986年。

幕末維新学校研究会編『幕末維新时期における「学校」の組織化』多賀出版、1996年。

幕末維新学校研究会、高木靖文編『近世日本における「学び」の時間と空間』溪水社、2010年。

- 幕末維新时期漢学塾研究会、生馬寛信編『幕末維新时期漢学塾の研究』溪水社、2003年。
- 尾藤正英『江戸時代とはなにかー日本史上の近世と近代ー』岩波書店、2002年（初版1992）。
- 尾藤正英『日本封建思想史研究ー幕藩体制の原理と朱子学的思惟ー』青木書店、1978年（初版1961）。
- 瀨上皓一郎「近世地方藩儒の学問形成と社会参加ー龍野藩儒股野玉川の学習日記を対象にー」『教育史フォーラム』4、2009年。
- 広島県内務部学務課『広島県教育小史』広島県内務部学務課、1922年。
- 前田勉『江戸の読書会ー会読の思想史ー』平凡社、2012年。
- 前田勉『江戸教育思想史研究』思文閣出版、2016年。
- 松尾由希子「江戸後期私塾をとりまく読書環境ー越後国長善館塾生時代の「惕軒日記」の分析よりー」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』50（2）、2003年。
- 三浦叶『明治の漢學』汲古書院、1998年。
- 水原克敏『近代日本教員養成史研究ー教育者精神主義の確立過程ー』風間書房、1990年、
- 三原市役所編『三原市史 第2巻 通史編二』三原市役所、2006年。
- 宮坂朋幸「教職者の呼称の変化に表れた教職者像に関する研究ー明治初期筑摩県伊那地方を事例としてー」『日本教育史研究』22、2003年。
- 宮坂朋幸「明治前期における資格としての「教員」問題」『滋賀文化短期大学研究紀要』18、2008年。
- 三好信浩『日本師範教育史の構造ー地域実態史からの解析ー』東洋館出版社、1991年。
- 八鍬友広『近世民衆の教育と政治参加』校倉書房、2001年。
- 吉田公平『日本における陽明学』ペリかん社、1999年。
- リチャード・ルビンジャー（石附実、海原徹訳）『私塾ー近代日本を拓いたプライベート・アカデミーー』サイマル出版、1982年。
- 渡辺浩『近世日本社会と宋学』東京大学出版会、1987年（初版1985）。
- 渡辺浩『東アジアの王権と思想』東京大学出版会、2018年（初版1997）。